

カンボジアで「中国」の存在の近さを感じるとき (特集 チャイニーズ・オン・ザ・グローブ)

著者	初鹿野 直美
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	202
ページ	13-14
発行年	2012-07
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00003924

カンボジアで「中国」の存在の近さを感じるとき

初鹿野直美



僻地で道路建設を行っている中国企業（ブレアヴィヒア州、2009年5月撮影）

二〇一一年夏、深夜のプノンペン、ポーチェント国際空港のチェックインカウンターに並んでいたときのこと、韓国行きフライトに並ぶ筆者の隣は、上海行きのフライトを待つ中国人でにぎわっていた。エコノミー席の列に労働者の一団が並び、その声の大きさと勢いに、こぎれい

な格好をした学生風の若く色白の中国人青年は、一瞬、同じ列に並ぶことに戸惑いを隠さなかった。労働者たちは約一〇人、三〇〜四〇歳くらいであろうか。電力会社の作業着を着る者、迷彩服を着る者、素足の者もあり、あきらかに、空港のなかで異彩を放っていた。

カンボジアに投資する中国人・中国企業は多く、投資法を制定した一九九四年以来の累積投資額は約七億ドルにのぼる（全体比四〇%、承認ベース）。また、援助資金においても、二〇一〇年の実施金額は一億一九〇〇万ドルにのぼり、二国間援助ではトップの日本（一億四〇〇〇万ドル）に迫る。とくに二〇〇〇年代半ばからは、毎年のように両国の要人が往来しては、多額の経済協力や投資プロジェクトの約束がされている。二〇一二年四月にも、胡錦濤国家主

席がASEAN首脳会議開催直前のプノンペンを訪問し、四〇〇〇万ドルの贈与と三〇〇〇万ドルの借款の約束をかわしたと報道されている。毎年のように報じられる大型案件には、道路インフラや水力発電ダム建設などがあり、冒頭に紹介した労働者たちは、おそらくダム建設にかかわる労働者・技術者たちであろう。二〇一一年には観光客およびビジネス客あわせて、二四万七〇〇〇人も中国人がカンボジアを訪れている（全体比八・六%、第三位）。

カンボジアは中国とは国境は接していないものの、地理的にそう遠くないところにあることから、古くから中国からの人の往来が活発である。一三世紀ごろカンボジアを旅行して『真臘風土記』^{しんろうふうどき}を記した周達観は、経済活動において活発な役割を担う中国人について、「以前は、（中略）唐人をみるとすこぶる畏敬」していたが、近ごろは中国人が多いために、地元の人にだまされる人たちもいると紹介している。一九六一年に刊行されたデルヴェールの『カンボジアの農民』では、小売業は潮州系中国人が独占していることを紹介しており、「現実には中国人は至る

ところにいる」と書いている。

現在、約一四〇〇万人のカンボジアの人口に対し、約七〇万人の中国系住民がいるといわれており、中国人の血をひくカンボジア人は数え切れない。プノンペン市内の商店は、クメール語の看板と併記するかたちで、中国語、英語を記すことが多く、はじめて中国からカンボジアに渡航した知人は、「漢字の看板が多いから迷子にならずにすむ」と感心していた。とくに都市部では、中国正月を祝ったり、清明節にお墓を掃除したり、中国系の祭事も欠かさないカンボジア人が多い。結婚式の招待状に、普段はつかわない中国名を併記する者もいる。漢字で書かれたものについて、「それが何であるか」、本人たちは理解していない場合も多いが、中国の風習は確実に生活のなかに根付いている。

一九七〇年代の内戦以降、カンボジア国内に住む中国系住民にとっては厳しい時代がつづいた。ポル・ポト政権による迫害（ただし、中国政府はポル・ポト政権と友好的な関係にあった）や、一九八〇年代のヘン・サムリン政権下でも中国系住民への圧迫はつづい

た。新たに中国人がビジネスチャンスを求めてカンボジアにくるようになってからは、一九八〇年代末になってからのことである。一九九〇年代半ばごろからカンボジアの経済を牽引している縫製業の多くが中国系の経営者によるものである。現在、縫製業は三〇万人の雇用を創出する最大の製造業であり、彼らの投資がなければ今日のカンボジアの経済発展はなかったであろう。二〇一一年には、中国銀行や中国商工銀行がプノンペンに支店を開設し、増える中国企業の資金需要に対処している。

中国をめざすカンボジア人もいる。筆者が数年前に訪問したコンポンチャム州のある中小企業を経営するカンボジア人男性は「息子にはビジネスをついでもらいたいから、中国に留学させてネットワークを築かせたい」と語っていた。カンボジア人の留学先としてもまた、中国は重要なパートナーのひとつである。また、中国とカンボジアのあいだを往来するもつとも有名な人といえば、シハヌーク前国王夫妻であろう。とくに二〇〇四年の退位後は、病氣療養を理由として多くの時間を北京で過ごしている。

以前にもまして高まりつつある中国の政治的・経済的影響力に、漠然とした不安をかかえる人たちがいないわけではない。しかし、国同士として中国はカンボジアの隣人のひとりであり、人びとの生活のなかにも「中国的な何か」が浸透しているのが現実である。

（はつかの なおみ／ジェットロ・バンコク事務所）



街中に並ぶ中国語の看板（プノンペン都、2011年8月撮影）